

令和5年度 第2回伊丹市文化振興ビジョン策定懇話会 議事概要

内 容	令和5年度 第2回伊丹市文化振興ビジョン策定懇話会
開催日時	令和6年3月7日(木) 14:00~16:00
開催場所	伊丹市役所 3階 303(柳)
出席委員	中協会長、岩崎委員、上田委員、衣川委員、吉田田委員
会 議 次 第	
1 開会 (1) 開会挨拶 (2) 資料確認 2 議題・意見交換 (1) 伊丹市における社会包摂について (2) その他関連事項 3 閉会	
発 言 要 旨	
【議題(1) 伊丹市における社会包摂について】 中協会長： ・伊丹市の障がい者・外国人・不登校の現状については事務局説明のとおり。「文化芸術における社会包摂」には決まったやり方がない。数字では表れないところや、いわゆるグレーゾーンのところで苦勞されているのではないか。 吉田田委員： ・アートスクールを26年運営。アートスクールの看板を掲げているが、みんながアーティストになるために来ているわけではない。どうも生きづらいなとか、アートの世界なら居場所があるような気がする人たちが救いを求めて集まってくる。ここなら安心して居れそうだと感じて。 ・グレーゾーンの子たちはたくさんいるが、グレーが悪いのではなく社会のレンジが狭すぎる。 ・社会の側に課題があると思っている。制度や施設をいきなり作るのではなくて、みんなが対話して社会のレンジを広げていく必要性を理解した先に制度や施設が出てくるべきでは。 ・そうすると、まずやらないといけないデザインは、対話が生まれるような仕掛けを作ること。 ・アートスクールの運営で気を付けているのは「常識の違いを面白がる文化」をつくること。スタッフには言葉や研修で教えるわけではなく、振る舞いを見て感じ取って伝染していくようなイメージ。文化はそうやって醸成されていくのだと思う。 ・制度や施設を作るのであれば、そういうことを感じている人が集う場所がいい。結局は対話が大事で、対話して議論した先に生まれたものは通用する。自分たちが議論した上でたどり着いた答えでやると、意識が変わっていく。 ・議論するので集まってくださいと言われるとしんどいので「なんか楽しいこと」が真ん中にあるといい。みんなで力を合わせて畑仕事をするとか、たとえば味噌づくりや編み物のようなサークル活動的なことをするとか。 ・トーキョーコーヒーの活動でも、一緒に手とかを動かしていると、目的がずれて自然な会話が出てくる。そういうことが生まれる仕掛けが必要。	

上田委員：

- ・手帳を持っていないボーダーライン上にいる方が多くいる。そういった人たちが居やすい場所の一つが、開かれたアートの場所。
- ・何かすることがあるというのがアートの特徴で、社会包摂の方法としてアートの場は有効。
- ・ココルームでの活動では、自閉的な人や攻撃性が高い人、虚言壁がある人などいろんな人たちがやってくる。そんな中でも、やはり安心してその場にいてほしいので、大阪市の発達障害者を支援しているセンターに相談してレクチャーしてもらったことがある。
- ・多様な人が来てくれるアートの場を作りたいという人が実際動き出すときに、専門的な知見を届けにいく仕組みがあれば安心できるかもしれない。

中脇会長：

- ・文化芸術とかアートの人たちだけで頑張らないことが大事。

上田委員：

- ・色んな選択肢をいっぱい作って提示するのに「アート」という言葉を使うとやりやすい。
- ・工夫するのが好きとか、好奇心を刺激するとか、アートの位置づけで味噌も作るし畑もするということにすると緩やかにいろんな人が出入りできる。
- ・「アート」と聞くとなんとなくいいねって思う人がいる一方で、閉じてしまう人もいる。

吉田田委員：

- ・社会的になんとかみんなが苦しくなっているのは、いろんなことが制度化されて秩序化が極まったような感じになっているからなのかもしれない。
- ・その一方で「よくわからんもの」とか「数字で計れないもの」、「へんてこなもの」の中に実は価値があったんだと感じ始めている時代でもある。
- ・アートは、長い歴史の中で「よくわからんもの」を「よくわからんまま」大事にしてきたし、大切にされてきた。なので、アートを中心に置くと「よくわからんもの」が許される。

岩崎委員：

- ・社会では発達障害が増えてきていると認識されているが、実は変わっていないのではないとも言われている。昔の農村社会ではそういう生きづらさを抱えた人たちを取り込む機能があったが、そういうコミュニティが今は希薄になってきているということではないか。
- ・そういう部分をアートが代替するということをしていけば社会がより良くなっていく。
- ・子どもたちに選択の機会を増やしてあげるのは、文化芸術、アートにしかできないこと。
- ・ネクタイを締めて会社に行くという生き方以外の生き方があることをアーティストは示せる。
- ・こういう生き方もあると子どもたちが思うことの「安心感」が大事で、こうでなきゃならないというモデルから解放してあげるのも文化の力だと思う。

衣川委員：

- ・フレンテホールの「なんだこれサークル」には学校に行くことができていない子も来る。
- ・ここでは自分がやっていることを認めてもらえる、みんなが真剣に話をしてくれるということがすごく楽しくて、毎回イキイキと参加している。
- ・それを狙っているわけではないが、偶発的にそういう子たちも吸い寄せられるように来る。

吉田田委員：

- ・偶発的に来るというのが素晴らしい。目的を明かさないと一番リーチするから行政的には一番やりにくいことかもしれないが、そういうやり方を見つけないといけないのでは。

岩崎委員：

- ・誰が来てもいいし、いつ帰ってもいいということであると公園のようなイメージ。
- ・何か意見を出したら相手もそれを受け入れるということがもっと浸透していくと、流動的で豊かな社会が形成されていくのではないか。
- ・社会であまり口にできないこと、いわゆるタブーを取り払うというのは、やはりそういう集いの場がないと無理だろう。

中協会長：

- ・文化芸術で社会包摂的なアプローチを考える場合は、課題解決や数字の回復ということが直接的な目的ではなく、「よくわからんもの」「未分化なもの」をそのまま受け入れること（ネガティブケイパビリティ）や何かしらのフィルターみたいなものを外すことに意味がある。
- ・「文化芸術で社会包摂をやろう」と現場が言ったときに「それは文化芸術でやることではない」という意見が出るかもしれない。社会包摂ということに関しては、文化芸術の範囲を限定的にせず、その境界線を取り除いてしまうべきではないか。
- ・世の中が作った既存の言葉で表現することによって意欲がそがれるとか「自分ごと感」がなくなるといったことが起こり得る。かえって「社会包摂」と言わない方がいいかもしれない。
- ・社会包摂のためのアートというのは、「よくわからんもの」を認める、包摂するというこのために使える。でも、文化行政としてこれをやるというのはかなりハードルが高い。
- ・そうすると、行政の役割はやはりスモールサポートで、社会包摂を実現する思いがある人や団体に具体的な活動を託す方が良いのかもしれない。

上田委員：

- ・言葉というのは一旦くっきりした後、時間の経過の中でそれが足枷になってしまうということもある。今回のビジョンでは、新しい言葉で名付けをしながらも、弾力性というか柔軟性を担保しながら、ちゃんと「対話が必要」ということを埋め込んでいく必要がある。
- ・堺市では文化行政で社会包摂に取り組むことが明確に定められていて、文化施設の職員が社会包摂に関する学びと実践をする事業を、アーツカウンシルと財団で連携して行っている。

中協会長：

- ・1年目は研修でロールプレイ的なことをして、2年目は財団の専任職員がこども食堂や福祉施設をチョイスし、研修参加者がアーティストと連携してアウトリーチ型のワークショップを企画実践した。その一連を研修事業として実施。
- ・こういう取り組みをしていると、社会福祉協議会が相談に来るといったことにも発展している。

岩崎委員：

- ・今回、伊丹市の文化振興ビジョンができて、そのビジョンに基づいて実際の事業や取り組みを動かしていく役割を担うのはやはり財団になるのか。

事務局：

- ・ビジョンに基づく取り組みを進めていくにあたって財団が担う役割は大きいと考えている。

岩崎委員：

- ・そうすると財団職員には、机に座って仕事することだけではなくて、もっと自由に動いて、外に出ていくことが求められることになるし、そういう人の人件費に対する資金も必要。
- ・以前から問題提起しているが、財団における人材育成がとても重要。いわゆるアウトリーチ的な考え方よりも、職員に向けたインリーチの方が大事なのかもしれない。

衣川委員：

- ・究極的には指定管理者制度の弊害かもしれない。制度自体が施設に縛られているから。制度を運用する行政側が「ハコの外まで広げていいよ」としてくれたらいい。
- ・施設の職員自身が多様性というようなものを受け入れる人生を送っていれば、自然とそういう発想になっていくような気がする。
- ・「意識の変容」がまちの中にたくさん生まれていけばいい。

上田委員：

- ・ホールが劇場法でいうところの「新しい広場」になるには、施設の職員が地域に出て行って「広場ですよ」と言いに行かないといけない。
- ・施設の職員たちにインリーチするためには、それぞれ地域に出ていろんな仕事の人たちと出会うとか、いろんな人生があるということを知って、自分の施設に戻るといえることが必要。

中協会長：

- ・社会包摂は、外へのアプローチも必要だが中の意識から変えるということも大事で、そういうことを両輪として同時に走らせるようなアプローチじゃないと浸透していかない。
- ・伊丹では長年財団が複数の施設の管理をしているので、堺市の事例（社会包摂に関する学びと実践）のようなことをやりつつ、それとは別でプレーヤーである市民に対するスモールな支援の取組みをやって、その相乗効果が広がるのが一番理想。

吉田田委員：

- ・「文化芸術における社会包摂」の主体は市民にあるはずで、そういうプレーヤーを増やす仕組みをつくるべきだと思う。
- ・いわゆるまちのプレーヤーの人たちや、プレーヤーまでいなくてもこのまちが好きとか、地域のことを何かしたいと思っているような人が集う場所があって、そういうところが盛り上がっていけば勝手にプレーヤーは増えていく。
- ・たとえば商店街のシャッターが下りてるようなところを市が買い上げて、そこで何をするでもなく「むっちゃ安く借りれるねんけどな」ぐらいのものを用意しておけば、そこを使う人が出てくる。そういう仕掛けが必要なのではないかと思う。

衣川委員：

- ・神戸市灘区の水道筋商店街は、阪神淡路大震災から行政の手を入れずにまちの人が自分たちで復興したまち。その後もうまく世代交代していて、30代40代の人たちが社会実験的なことをわざとやったりしている。

中協会長：

- ・公共が持っている使いようのない小さな土地を、チャレンジショップではないけど、社会実験としてなにか自由に、しがらみなくチャレンジできる場所として用意すると、プレーヤーが勝手に増えるのではないかとということ。

吉田田委員：

- ・内部ではしっかり議論して、そういうことを醸成する場所として用意するけど、表向きには「よくわからん場所」でいい。
- ・そこに「このまちが好き」という人が集まってる。そしてその姿を外から見られるということがすごく大事だと思う。そういう「このまちが好き」な人たちがいるんだということが見えると、勝手に次のプレーヤーが生まれていく。

中協会長：

- ・取組みを評価する場合、その中身の“質”を評価するのではなく、取組みの“工数”を評価するのがいいと思っている。中身に対して「これがいい」とか判断のしようがないので。

衣川委員：

- ・関わった人が、たとえば5年後に「こうだったね」「ああだったね」と振り返った時に、その人にとって「実はすごく救われた」とか「人生の転換点だったかもしれない」とか、そういうことが評価につながる仕組み。

中協会長：

- ・いろんな人が集まって話している時間とかはそれだけでも評価できるが、それと併せて5年後どうなったか、どれだけ意識が変容したかを関わった人たちに追跡調査してみるとか。

吉田田委員：

- ・評価をするためには「どうなればいいか」がないと評価できない。その「どうなればいいか」を設定するには「何が豊かなのか」を議論することは避けられないのでは。
- ・まちって“お客さん”のように住んでいる人が大半だと思っている。なので、そうじゃなくなった人、まちを自分ごととして捉えられるように意識が変わった人がどれほどいるかというのは大きな評価軸ではないかと思う。

上田委員：

- ・まちを自分ごとに思えることを数字として出すのはとても難しいだろうと思うが、もっと緩やかに言えば、居場所の数というのは評価としてカウントできるかもしれない。

中協会長：

- ・文化行政の経済波及効果というのはよくあるが、伊丹ではにぎわい活性化に向けた文化行政の数値評価はすでに十分あると思っている。
- ・社会包摂は経済効果で評価できるものではないので、サードプレイスの機能というか、いろんな人が集まって、そんな中で折り合いをつけ合ったり理解し合ったりすることの“場所”や“機会”をカウントできるといいかもしれない。

吉田田委員：

- ・繰り返しになるが、そういった“場所”は「集う場所ですよ」と表明しなくてもいいと思う。
- ・その“場所”で何かをやるという意味での目的は、サークル活動的なものでもいいし、演劇でもいいし剣道でもいい。その目的のために集うけど、結果として、その目的を介して“繋がり”や“安心”が生まれて、それが地域の結びつきになっていく。

中協会長：

- ・アートプロジェクトがたくさん立ち上がるということでもいいかもしれない。
- ・「アートプロジェクト」と言っても言わなくてもいいし、アートといえるかどうかかわからないようなそのぐらい未分化なものも「アートプロジェクト」と言って実施する。

吉田田委員：

- ・そうやってやったことが評価されるようにしないと、誰も気づかない。

中協会長：

- ・次回は、評価の仕組みにも踏み込んだような案をお見せして、それをたたき場にしたい。

以上